

乳児の愛着行動と行動的抑制傾向^{1) 2)}

— 家庭での母子短期分離再会場面を使用して —

水 野 里 恵³⁾

問 題

愛着の測定法である Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) のストレンジ・シチュエーション法 (Strange Situation Procedure: SSP) では再会場面での乳児の6つの対母親行動が重要な愛着の質判定の規準となる。なぜならば、この測定法の背景には、母親が乳児の安全基地として機能しているのであれば、「適度な」ストレス状態に置かれた乳児は母親に対して「適切な」愛着行動を示し、母親に慰められることによって精神的安定を取り戻し、再び探索行動に戻っていくとの考えがあるからである。だが、乳児の愛着を測定するのに、「適度な」ストレスとはどの程度のものか、「適切な」愛着行動とは何かといった観点からSSPの文化的妥当性について議論がなされてきている (Grossmann & Grossmann, 1990; LeVine & Miller, 1990; Sagi, 1990; Takahashi, 1990)。SSP は実験手続きと評定法がマニュアル化されているため、アメリカ以外の文化圏においても愛着を測定する便利な実験手法として広く使われている (Van IJzendoorn & Kroonenberg, 1988)。ところが、同じ実験場面を設定しているにもかかわらず、文化圏ごとに乳児の愛着の質の分布、すなわち、A (不安定回避型)・B (安定型)・C (不安定抵抗型) に分類される人数の分布がかなり違う。西ドイツではAに分類される乳児の数が多く、日本・イスラエルはAは少なくCが多い。こうした文化間における分布の違

いは、SSP が乳児の愛着行動を誘発する適度なストレスとして普遍文化的に機能していないのではないかとこの観点から議論されるようになった。すなわち、西ドイツにおいては乳児の寝室は両親の寝室とは別室になっている子どもの自律性を要求する傾向が育児スタイルにおいて見られる。一方、イスラエルのキブツにおいては乳児が見知らぬ大人と交わるといったことは日常あまり起きない。また、日本では母子が密着していることが多く乳児が母親と離れ一人置いておかれるといったことは稀である。このように、生後一年間の乳児の経験は文化によって違うので、愛着行動を誘発する「適度な」ストレスは文化によって違うのではないかという議論である。そして、Takahashi (1990) は、SSP での2回目の分離は乳児が初めて来た実験室に全く一人で取り残される状況であり、日本での生後一年間の乳児の分離体験という視点から見た場合ストレスが強すぎることを指摘し、このエピソード以降Cとなる子どもを pseudo-C と分類している。

こうした先行研究から得られた知見と、現時点ではベビーシッターという慣習が欧米ほど普及しておらず生後一年間において乳児が母親と離れ普段とは違った状況で過ごすことが少ないという日本の事情を考慮に入れ、以下の点を検討することが目的とされた。乳児にとっての「適度な」ストレスを与える実験的観察場面として家庭での母子分離再会場面を設定し、そこでの乳児の愛着行動の組織化のパターンを検討することである。ここで、家庭での実験的観察場面を設定することの有用性について別の観点から触れておきたい。日本で実施されたSSPを観察した Grossmann & Grossmann (1988) は、この実験的観察法において日本の母親に特徴的に見られる行動が乳児の行動に影響を及ぼしているのではないかという見解を表明している。その指摘によれば、日本の母親は、欧米の母親に比較すると、最初のエピソードにおいて緊張が高く、第2場面では乳児を所定の位置におろした後すぐに決められた自分の席に行き実験手続きの説明を読むのに忙しくしており、乳児がぐずったり

- 1) 本論文を作成するにあたりご指導くださいました、名古屋大学教育学部教授小嶋秀夫先生に感謝いたします。
- 2) 本研究は水野の修士論文 (1992) のデータの一部を乳児の行動的抑制傾向の観点から再分析したものである。ビデオ分析には名古屋大学大学院教育学研究科陳恵貞さんに協力していただきました。記して感謝いたします。
- 3) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程 (後期課程)

してもなだめたりしない。すなわち、母親自身が緊張しており乳児の不安や緊張を緩和するだけの余裕がないので、母子分離をする前から乳児のストレスが高くなっているのではないかという指摘である。また、日本の母親は実験室への入退室にあたりスリッパを履いたり脱いだりするという独特の行動をする。このため、分離場面への移行にあたっては退室に手間取り、結果として乳児のストレスを増している。また、再会場面においては、泣いたりしている乳児の側に行くのに時間がかかってしまうことになる。すなわち、インストラクションを与えることによって統制されているはずの母親行動そのものが、統制されていないのではないかという指摘である。これらの問題は、家庭での観察場面を設定し母親の緊張を緩和することによって克服することができるのではないかと考えられた。一方、SSPが開発された経緯に目を向けると、家庭での母子分離再会場面の持つ有用性が明らかになる。Ainsworth, et al. (1978) はウガンダの村落に住む26組の母子の行動観察の知見に基づいてSSPを開発したのであるが、その理由は、ウガンダの家庭における観察場面で見られた乳児の愛着行動の個人差がアメリカバルチモアの乳児においては見られなかったというところにある。そこで、アメリカの乳児の愛着行動の個人差を測定するために、愛着行動を誘発するようなストレスを与える目的でSSPが開発されたのである。ゆえに、もし愛着行動の意味のある個人差が家庭での観察場面で見られるのであれば、家庭において母子分離再会場面を設定することには積極的な意味があると考えられる。以上のような事情により、本研究では、家庭での母子分離再会場面を設定し、そこで見られる乳児の愛着行動の組織化のパターンとその個人差について検討することにした。

さて、本研究においては、乳児の愛着行動として、愛着対象人物を探索の安全基地として利用する行動とその人物に対して行なうコミュニケーション行動との2種類を含めて考える (Seifer & Schiller, 1995)。ここで注意しておきたいのは、愛着行動を対象人物に近づく行為に限定して考えるのではなく、その対象人物を参照しながら行なう探索行動をも愛着行動に含めて考えるという点である。なぜならば、対象人物が安全基地として機能しているのであれば、その人物を参照しながら行なう探索行動が促進されると考えられるからである。ただこの視点に立つと、新生児期から比較的安定してみられる子どもの気質的行動特徴である新奇なものに対する個人差である行動的抑制傾向 (Kagan, 1989) が、乳児の愛着行動と関連を持ってくる可能性が考えられる。なぜならば、新しい人物や事態に対して積極的である行動的

抑制傾向にある乳児は、そうでない乳児に比較すると、母親を参照しながら行なう探索行動も当然多くなるのではないかと予想されるからである。

ところで、従来から乳児の行動的抑制傾向における個人差がSSPで測定される愛着の質に影響しているのではないかという議論はなされてきた。その場合の議論は、SSPの妥当性の観点から以下のような論理でなされることが多かった。すなわち、SSPは新奇な場面を設定することによって乳児にストレスを与える実験的観察法であるが、この新奇なものに対する反応に個人差があれば、SSPで観察される乳児の行動に基づいて評定される愛着の質は、純粹に乳児の愛着対象人物との関係性における個人差を測定していると仮定することはできないのではないかという論理である。こうした論理を実証的に検証しようとする立場から、乳児の行動的抑制傾向とSSPで測定した愛着の質との関連を検討する研究が行なわれている。Calkins & Fox (1992) と Fox & Calkins (1993) は、乳児が行動的抑制傾向 (新しい場面や人物に対して消極的) にあるとSSPによる愛着の判定がCに、その反対に乳児が新奇なものに対して積極的であるとAになるという結果を報告している。一方、LaGasse, Gruber, & Lipsitt (1989) と Nachmias, Gunnar, Mangelsdorf, Parritz, & Buss (1996) は、乳児の行動的抑制傾向と愛着のグループ分けには関連が見られなかったとの結果を報告している。このように、行動的抑制傾向と愛着の質の関連を検討した先行研究からは現在のところ一貫した結論が得られていない。

また、乳児の対人的コミュニケーションスタイルにおける個人差と愛着行動の関連に注目した研究は以下のような結果を報告している。Thompson & Lamb (1983) は、乳児が再会場面において母親と距離を置いた相互交渉を好むか、あるいは身体的な接触維持を好むかは、別の実験状況を設定して測定した「見知らぬ人」に対する乳児の行動と関連を持つことを報告している。Sagi, Van IJzendoorn, & Koren-Karie (1991) は、分離以前のエピソードで「見知らぬ人」に対して示す乳児の対人交渉のコミュニケーションスタイルから再会場面における乳児の対母親行動が判別できるとの結果を示している。このような乳児の対人的コミュニケーションスタイルに注目した研究は、行動的抑制傾向という概念を用いてはいないが、「見知らぬ人」に対して積極的か消極的かという次元における個人差と再会場面での乳児の対母親行動との間に関連を見いだしている。すなわち、「見知らぬ人」に対して物怖じしないでコミュニケーションがとれるような非抑制的気質の子どもは、身体的近接のある相互交渉よりも距離を置いた相互交渉を好む傾向

にあり、ゆえに、再会場面における対母親行動も距離を置いたものになったと解釈するのである。これらの先行研究が提起している問題は、乳児の行動的抑制傾向における個人差が、少なくとも再会場面の対母親行動と何らかの関連を持っているのではないかということである。

上述したように、乳児の行動的抑制傾向と愛着行動や対人的コミュニケーションスタイルとの関連性は示唆されているものの、結果は必ずしも一貫してはいない。ところで、この問題は、乳児の気質が関係性のどのような側面にどのような影響を及ぼしているのかという観点から見た場合、積極的に検討されるべきであると思われる。なぜならば、Stevenson-Hinde (1988) が指摘するように、行動的抑制傾向という個人の気質的行動特徴と母親をどのようにして安全基地として使うのかといった関係性の一面を見ることは、個人の特性がその個人が他人と持つ関係にどのような影響を及ぼしているかを見るための一つの有益な方法であるからである。

そこで、上述したような2つの問題点、すなわち、1. SSP は、日本の乳児にとって愛着行動を誘発する実験的観察法としては「適度な」ストレスのレベルを超えており、母親の緊張も高く乳児のストレスを増加させるような行動をとる、2. 乳児の行動的抑制傾向が、母親を安全基地として参照しながら行なう探索行動や母親に対するコミュニケーションスタイルと関連を持っているのではないか、を踏まえた研究を実施することにした。本研究で検討するのは以下の2点である。第一に、家庭での母子再会場面における乳児の6つの対母親行動の組織化にはどのようなパターンが見られるのか、また、その組織化のパターンはSSPで見られる組織化のパターンすなわち愛着の質と何らかの対応をするのかといった点に関してである。第二に、行動的抑制傾向における個人差は、愛着行動、すなわち乳児の対母親行動や母親を安全基地として利用する探索行動、を予測するものとなるのかといった点に関してである。

方 法

被験者：核家族の専業主婦の母子40組（男児20名、女児20名、すべて第一子）。実験的観察調査は1991年4月下旬から6月中旬にかけて、乳児が12カ月齢から14カ月齢の時に実施された。

手続き：家庭訪問予定日の1週間前に実験手続きを記載した手紙を送付し電話で当日の手順について説明した。家庭訪問による実験的観察をTable 1の要領で実施した。

子どもの行動評定：実験者と最初に顔を会わせた時の反応・実験者からの挨拶に対する反応については6段階で

Table 1 実験的観察手続

行動的抑制傾向の測定

1. 実験者と初対面での子どもの様子（行動観察記録用紙への記入）

- (1) 実験者（筆者）と最初に顔を合わせたときの子どもの様子
- (2) “○○ちゃん、こんにちは” という呼びかけに対する子どもの様子

2. 見慣れぬ玩具を近づけたときの子どもの行動・情動表出（ビデオ録画）

玩具は、縦24cm、横12cm、高さ17cmのブタの玩具

色が黒いのと近づきながら鼻を鳴らすので一見気味が悪い

- (1) 母親に子どもを膝の上に抱いて座ってもらう。
- (2) 実験開始の合図があったら、母親は子どもを前に降ろし、黙って様子を見ている。
実験開始の合図と同時に黒いブタが子どもに向かって接近する。
- (3) 15秒たっても子どもが自分から玩具に触らないときは、実験者は子どもに玩具に触るよう促す。

短期母子分離・再会エピソードにおける子どもの行動観察（ビデオ録画）

- (1) 子どもの一人遊び…3分
- (2) 短期母子分離…3分
- (3) 母子再会場面…3分

* 母親に対するインストラクション

この実験はお母さまが用事がある時や、一時的にお子さまのそばを離れなくてはならない時にお子さまがどのように遊んでいるかを観察するものです。お母さまは普段なさっているようにできるだけ自然にふるまってください。

- (1) 3分（お子さまのごきげんが悪いときは、落ち着くまで延長）

合図がありましたらお子さまを決められた位置に座らせてお母さまは、読書なさってください（新聞・雑誌何でも結構です）。お母さまの方からお子さまの注意をひくように積極的に働きかけることはしないでいただきたいのですが、お子さまがお母さまに声をかけたり働きかけてきたときは、自然な感じで答えてあげてください。また、お子さまがぐずったりしたようなときにはおもちゃで一人で遊べるよう励ましてあげてください。

- (2) 3分（お子さまのごきげんが悪いときは短縮）

次の合図がありましたら、お母さまは、ドア（ふすま）の所まで行って立ち止まり、「○○ちゃん、ちょっと待っててね。」と言って、お部屋の外へ出てください。外へ出られましたら、アンケートにお答えください。次の合図があるまで、お部屋の外でそのままお待ちください。ただし、お子さまの様子がひどく気になるようでしたら、次の合図がなくても、お部屋に戻ってくださって結構です。

- (3) 3分

3分したら合図をしますので、ドア（ふすま）の外側から、「○○ちゃん」と大きな声でお子さまの名前を呼んで、3つ数えてから、ドア（ふすま）をあけて入ってきてください。そして、閉めたドア（ふすま）の内側で立ち止まって、お子さまの顔を見てから、お子さまがおもちゃで一人で遊べるように励ましてあげてください。そして、一番最初のように、お子さまを決められた位置に座らせて、お母さまは、読書なさってください。

Table 2 行動評定規準

実験者と最初に顔をあわせたときの反応

- 1 実験者に対して微笑んだり、うれしそうな声を出す。
- 2 実験者に対して（機嫌が悪いのではない）声を出す。
- 3 興味深そうに実験者を見る。
- 4 母親の側に寄る。
- 5 驚いたような困ったような情動を表す。
- 6 実験者を避ける。

実験者からの挨拶に対する反応

- 1 明らかな歓迎の様子を示す。
- 2 うれしそうな声を出す。
- 3 （機嫌が悪いのではない）何らかの反応を返す。
- 4 じっと見ている
- 5 気に留めない。（反応を返さない。）
- 6 目をそらす。（明らかに実験者を避けていることがわかる。）

見慣れぬ玩具を近づけたときの反応

- 1 玩具に興味を示す。Positive な情動表出。（後から嫌がるかもしれないが、自分から興味を持って近づく場合）
- 2 興味半分・恐さ半分といった感じ。情動表出には Negative なものが多少見られるが、わずかである。（じっと見ている。手をだそうとするかと思えば、尻込みしたりもする。）
- 3 恐がっている。（玩具から後退したり、そのままじっとしていても玩具が接近すると明らかな Negative な情動表出が見られる。）
- 4 非常に恐がる。（母親にしがみついたり、強い泣きがみられる。）

一人遊び場面

- 1 母親の援助を受けて遊んだり、母親と一緒に遊んでいる。
- 2 母親に関心が向き遊びが抑制される。
- 3 母親の援助なしに遊ぶことができる。
- 4 積極的に探索活動をする。

分離場面

- 1 エピソードの大半を一人での遊びに熱中している。（泣きやぐずりが無い）
- 2 エピソードの半分は一人で遊ぶ。（泣きやぐずりが時々見られる。）
- 3 エピソード中泣きやぐずりが見られ、遊ぶことができない。
- 4 泣きやぐずりが激しく、エピソードの中断が余儀なくされた。

再会場面

接近行動

- 無 Ainsworth (1978) 評定 1 & 2
- 有 Ainsworth (1978) 評定 3 ~ 7

接触維持行動

- 無 Ainsworth (1978) 評定 1 & 2
- 有 Ainsworth (1978) 評定 3 ~ 7

抵抗行動

- 無 Ainsworth (1978) 評定 1 & 2
- 有 Ainsworth (1978) 評定 3 ~ 7

回避行動

- 無 Ainsworth (1978) 評定 1 & 2
- 有 Ainsworth (1978) 評定 3 ~ 7

母親を距離を置いたところから歓迎する行動

- 無 Ainsworth (1978) 評定 1 & 2
- 有 Ainsworth (1978) 評定 3 ~ 7

母親との距離を置いた相互交渉行動

- 無 Ainsworth (1978) 評定 1 & 2
- 有 Ainsworth (1978) 評定 3 ~ 7

評定 (Table 2) し、カメラセッティング中に行動観察記録用紙に記入した。見慣れぬ玩具に対する反応・一人遊び場面・分離場面の行動については、Table 2 の規準に従い、ビデオ分析により評定した。再会場面における乳児の接近行動・接触維持行動・抵抗行動・回避行動・距離を置いた歓迎行動・母親との距離を置いた相互交渉の6つの対母親行動それぞれの定義は Ainsworth, et al. (1978) に従い、そうした行動の有無について評定した ((Ainsworth, et al. (1978) の評定3以上を行動有りとして扱った)。

評定の信頼性：ビデオ分析については、サンプルの25%にあたる10ケースについて十分に訓練された分析者が独立に評定を行ない、その一致度を算出した。その結果、信頼性係数 (κ) は、.55~1.00であった (平均=.81)。

結 果

1. 子どもの行動的抑制傾向尺度の作成

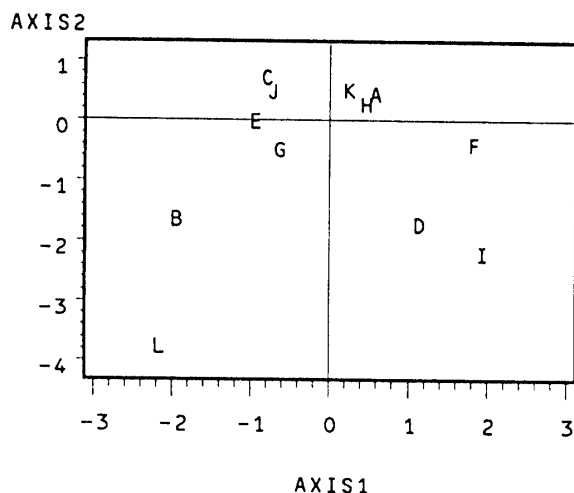
子どもの行動的抑制傾向を表すと考えられる、実験者と最初に顔を会わせた時の反応・実験者からの挨拶に対する反応・見慣れぬ玩具に対する反応の3場面の評定の相互相関係数は、.31~.54の間 (N=40, $p<.05$, 片側検定) にあった。この3場面の加算平均値を求め、それを行動的抑制傾向得点とした。行動的抑制傾向得点の平均値は3.26 (SD=1.01) であった。

2. 再会場面の乳児の対母親行動の構造

乳児の6つの対母親行動の有無についての40人の内訳は、接近行動 (有り31人：無し9人)、接触維持行動 (11：29)、抵抗行動 (6：34)、回避行動 (14：26)、距離を置いたところからの歓迎行動 (12：28)、距離を置いた相互交渉行動 (19：21) であった。

6つの対母親行動の構造を調べるため、6つの行動の有無に対し数量化Ⅲ類を適用した。第Ⅰ軸、第Ⅱ軸の固有値はそれぞれ .37, .18であり、この2軸をもとに描いた散布図が Figure 1 である。第Ⅰ軸は、正の方向に接近無し・歓迎有り・回避有り・維持無しが、負の方向に抵抗有り・維持有り・歓迎無しが配置されていることから、母親との距離を表す軸と解釈できる。第Ⅱ軸は、正の方向に回避無し・抵抗無し・接近有りが、負の方向に抵抗有り・接近無し・回避有りが配置されていることから、母親に対して友好的な表出を表す軸と解釈できる。そこで、第Ⅰ軸を「母親との距離」の軸、第Ⅱ軸を「友好的表出」の軸と命名し、それぞれの数量化得点を「母親との距離得点」・「友好的表出得点」とした。

次に、6つの対母親行動の有無の情報に基づき群間平均法による階層的クラスター分析を実施し、被験者の分



行動	A 維持無	B 維持有	C 回避無
	D 回避有	E 歓迎無	F 歓迎有
	G 交渉無	H 交渉有	I 接近無
	J 接近有	K 抵抗無	L 抵抗有

Figure 1 6つの対母親行動のカテゴリスコア (数量化Ⅲ類 1軸×2軸)

Table 3 クラスター分析による3群の特徴

クラスター	人数	母親との距離得点		友好的表出得点	
		平均	SD	平均	SD
1	22	0.045	0.36	0.257	0.31
2	11	-0.673	0.26	-0.267	0.39
3	7	0.915	0.29	-0.388	0.15
F 値		51.8***		16.3***	
Tukey		3>1, 3>2, 1>2		1>2, 1>3	

*** $p<.001$

類を行なった。その結果得られた3つのクラスターの人数・数量化得点の平均値をTable3に、2つの数量化得点軸上に描いたクラスターの散布図をFigure2に示した。それらの結果を見ると、第1クラスターの22人は母親に対する友好的な表出が高い点で特徴的であり、第2クラスターの11人は母親との距離が小さく非友好的な表出をする傾向にある群、第3クラスターの7人は母親との距離が大きく非友好的な表出をする傾向にある群といえる。

3. 一人遊び場面での子どもの探索行動

一人遊びのエピソードで積極的に探索活動をしていた子ども (評定4) は17人 (42.5%)、母親の援助を必要とすることなく一人で遊んでいた子ども (評定3) は18

乳児の愛着行動と行動的抑制傾向

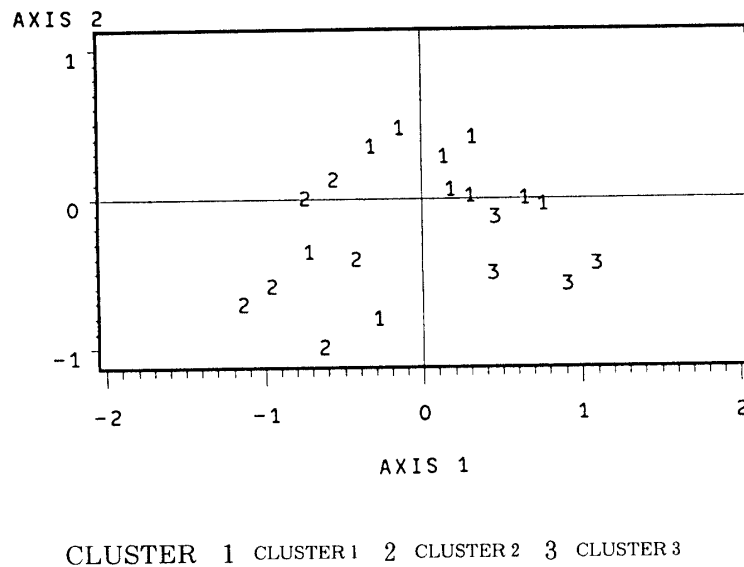


Figure 2 数量化Ⅲ類の2軸上にプロットした個人

人 (45.0%), 母親に関心が向いており遊びが抑制されていた子ども (評定 2) が 2 人 (5.0%), エピソード中母親の援助がなければ遊ばなかった子ども (評定 1) が 3 人 (7.5%) であった。各個人に与えられた評定を、子どもの探索行動得点とした。

4. 分離場面での子どもの動揺

母親との分離場面で、エピソード中泣きやぐずりを表明することなく遊んでいた子ども (評定 1) は 9 人 (22.5%), エピソードの半分は機嫌が悪くなることなく遊んでいた子ども (評定 2) は 13 人 (32.5%), エピソード中泣きやぐずりが見られ遊ぶことができなかった子ども (評定 3) は 9 人, 泣きが激しくエピソードを中断せざるを得なかった子ども (評定 4) が 9 人 (22.5%) であった。各個人に与えられた評定を子どもの分離動揺得点とした。

5. 行動的抑制傾向・探索行動・分離場面での動揺・対母親行動との間に見られる関連

子どもの行動的抑制傾向・探索行動・分離場面での動揺・対母親行動の間に見られる関連を検討するため、行動的抑制傾向得点・探索行動得点・分離動揺得点・2つの数量化得点 (「母親との距離得点」・「友好的表出得点」) との相関を見たのが Table 4 である。行動的抑制傾向と探索行動との間に有意な負の相関が見られ、行動的抑制傾向にある子どもの方が探索行動をしない傾向にあった。分離動揺得点と母親との距離得点の間に有意な正の相関が見られ、分離場面で動揺した子どもの方が再会場面で母親との距離が近かった。

Table 4 行動的抑制傾向・探索行動・分離動揺・対母親行動の間の相関

	探索行動	分離動揺	母親との距離	友好的表出
行動的抑制傾向	-.39*	.24	-.08	.10
探索行動		-.17	.01	-.01
分離動揺			-.66***	-.06

*** p<.001 * p<.05

Table 5 3群の行動的抑制傾向・探索行動・分離動揺得点の平均値

クラスター	人数	行動的抑制傾向	探索行動	分離動揺
1	22	3.42 (1.08)	3.09 (.92)	2.36 (1.14)
2	11	3.03 (.88)	3.36 (.92)	3.18 (.75)
3	7	3.10 (.99)	3.43 (.53)	1.57 (.53)
F 値		0.66	0.59	6.15**
Tukey				2>3

** p<.01

また、再会場面での3つのクラスターの、行動的抑制傾向得点・探索行動得点・分離動揺得点それぞれの平均値を Table 5 に示した。一元配置の分散分析の結果主効果が有意になった分離動揺得点に関して Tukey 法による下位検定を行なったところ、クラスター 2 の平均値がクラスター 3 の平均値より有意に高かった。

考 察

1. 乳児の再会場面における6つの対母親行動の構造

SSPで愛着の質の判定の規準とされる、母子再会場面での乳児の6つの対母親行動の有無は、母親との距離を表す軸と母親に対する友好的な表出を表す軸との2軸からなる平面上にプロットして理解することができた。このうち、友好的な表出を表す軸は、SSPでの安定愛着か不安定愛着かを判定する次元に対応すると考えられる。また、6つの対母親行動の有無の組み合わせによって乳児を3つのクラスターに分類できることができたが、その3つのクラスターは、母親に対して友好的な表出をすることで特徴的な第1クラスター、母親との距離が小さく非友好的な表出をする傾向にある第2クラスター、母親との距離が大きく非友好的な表出をする傾向にある第3クラスターとなっており、SSPでの安定型・不安定アンビバレント型・不安定回避型といった愛着の質によるグループに対応するものになっていると考察された。すなわち、家庭での母子短期分離後に乳児が母親に対して示す行動の組織化のパターンは、SSPでの母子再会場面での対母親行動の組織化のパターンと同様、大きく3つの型に分類することが可能であると考えられた。

2. 乳児の行動的抑制傾向と再会場面での対母親行動・母親を参照しての探索行動との関連

乳児の行動的抑制傾向が再会場面での対母親行動に関連しているかを検討した結果、行動的抑制傾向と母親との距離得点・友好的表出得点との間には有意な相関は見られなかった。また、3つのクラスターの行動的抑制傾向の平均値にも有意な差は見られなかった。この結果は、行動的抑制傾向とSSPで測定した愛着の質との間には関連は見られなかったとするLaGasse, et al. (1989)とNachmias, et al. (1996)の結果に一致するものであった。また、乳児の行動的抑制傾向は再会場面で母親に対して友好的表出をするか非友好的表出をするかといった次元と関連がなかったばかりでなく、母親との距離があるかないかといった次元とも関連がなく、見知らぬ人物に積極的であるような行動的非抑制傾向にある乳児はSSPの再会場面で母親に距離を置いたコミュニケーションを好むというThompson & Lamb (1983)やSagi, et al. (1991)の結果を支持しなかった。一方、行動的抑制傾向と探索行動の間には有意な負の相関が見られ、行動的抑制傾向にある乳児は探索行動が抑制される傾向にあった。以上のことから、乳児の行動的抑制傾向は愛

着行動の一側面である母親を参照しながらの探索行動と関連を持つのみで、母親に対するコミュニケーションスタイルとは関連しないことが明らかになったわけである。このことは、ストレス状態におかれた乳児が母親に対して示すコミュニケーションスタイルは、乳児の個人的特性には影響されない関係性の質を表しているのではないかと考えられることを示唆したといえよう。

3. 分離場面での子どもの動揺と再会場面での対母親行動

再会場面での乳児の対母親行動の組織化のパターンには行動的抑制傾向は直接関連を持たなかったが、分離場面で子どもが動揺したか否かは、再会場面で母親に距離を置いた行動が多くなるか近接した行動が多くなるかに関連していた。だが、分離場面での動揺は、母親に対して友好的表出をするか非友好的表出をするかといった次元には関連していなかった。このことから、安定愛着か不安定愛着かを判定するのに規準となる次元は、子どもの分離場面での動揺に左右されるものではないと考えてよいと思われた。

以上、実験的観察結果に基づきながら、家庭での母子短期分離再会場面で観察される乳児の愛着行動の組織化のパターンと、乳児の行動的抑制傾向と愛着行動との関連を考察してきた。その結果、家庭での母子短期分離後の再会場面で乳児が母親に対して示す行動の組織化のパターンは大きく3つに分類され、その分類はSSPでの愛着の質の分類に対応するものと考えられた。また、愛着行動の一側面である母親を安全基地として利用しながら行なう探索行動はその子どもの行動的抑制傾向における個人差と関連があると思われたが、再会場面での対母親行動の組織化のパターンと子どもの行動的抑制傾向との間に関連性はないと考えられた。一方、母子分離場面での乳児の動揺は、再会場面で母親に近接するか否かの次元には関連していたが、母親に友好的表出をするか否かに関連した次元には関連しておらず、愛着の質の判定には影響しないものであろうと考察された。これらのことから、家庭での母子短期分離後の再会場面の乳児の行動から愛着の質を推測するという方法は、乳児の新奇なものへの反応における気質的個人差に影響されず、その前の分離場面での情動状態にも影響されない、かなり幅のある愛着表出行動を観察しうる測定法であることが示唆された。ただ、そこで見られる乳児の行動がその子どもが持つ「愛着」を反映したものであるかについては、SSPとの対応が得られたことと「愛着理論に依拠すれば」という2つに基づいて、推測されているにすぎない。

今後、母子相互作用の観察やストレス状態に置かれた乳児が母親以外の大人にどのような行動を示すのかといった情報から乳児が母親に対して持つ「愛着」をできるだけ正確に推測し、そのようにして推測された「愛着」の個人差と、家庭での母子短期分離・再会場面設定で見られる乳児の母親に対する行動における個人差が対応しているかを慎重に検討していく作業が必要になるだろう。

一方、行動的抑制傾向と探索行動の間には有意な負の相関が見られ、行動的抑制傾向にある乳児は探索行動が抑制される傾向にあったが、この結果は、愛着の測定をQ分類法 (Waters & Deane, 1985) で実施する場合に留意しておかなければならない問題を提起したといえるだろう。近年、乳児の愛着測定はQ分類法によって行なわれることも多くなっている (Moran, Pederson, Pettit, & Krupka, 1992; Pederson, Moran, Sitko, Campbell, Ghesquire, & Acton, 1990; Scholmerich, Fracasso, Lamb, & Broberg, 1995)。また、近藤 (1993) は、わが国における SSP 実施に関する問題点を整理したうえで、Q分類法によるアタッチメントの測定が有効ではないかとの見解を表明している。だが、このQ分類法は、近藤 (1993) 自身が指摘するように、「行動特性、すなわち、個人の属性としてのアタッチメントの安定性を評価するものであり、関係性としてのアタッチメントをとらえていない」点で問題となる。すなわち、Waters & Deane (1985) の項目を見るとわかるように、個人の行動特徴と考えた方が適切な項目が含まれているのである。その中でも、新奇なものに対する積極的な反応や探索行動の活発さなどは、それが安定した愛着の質が形成されている結果として表出されている行動であるとの考えに立脚しているものの、関係性としての愛着を測定する項目と考えるのには無理があると思われる。SSP による愛着の質の判定が再会場面での乳児の対母親行動に重点を置いて行なわれるのに比べ、アタッチメントのQ分類法は乳児の探索行動と母親に対する愛着表出行動とを同列に扱う。さらに、母親を参照しながらの探索行動ではなく、乳児が一人で行なう探索行動をもその測定項目として含んでいる。母親に対し安定した愛着が形成されていればその母親が安全基地として機能するので探索行動が活発になるというのが愛着理論であるが、そこから、アタッチメントのQ分類法は、その質問項目が示すように、乳児の探索行動を測定することによってその乳児が持つ愛着を推測しようとしているように見受けられる。だが、乳児の探索行動は、本研究の結果によれば、愛着の安定性からばかりでなくその子どもの行動的抑制傾向という気質的行動特徴からも影響を受けていると思われる。Q分類法によって愛着の測定を行

なう場合には、乳児の行動的抑制傾向における個人差を考慮したうえで、愛着の安定性を判断するなどの必要があると思われる。また、SSP を実施する場合には、本研究で得られた知見に基づいて、事前に乳児の行動的抑制傾向における個人差を測定し、その個人差を考慮に入れて母親を安全基地として利用する探索行動を評定するなどの工夫をすることが望ましいと思われる。

ところで、本研究では、乳児の行動的抑制傾向といった個人の特性が、その乳児の対人関係の質を反映すると思われる愛着行動の一部であるところの母親を参照しながらの探索行動と関連することが明らかになった。だが、乳児が新奇な人物や事態に対して積極的であると母親を参照しながらの探索行動のみが活発になるのか、あるいはどのような人物であってもその人物を参照しながらの探索行動は活発なのかは検証されていない。もし、後者であれば、行動的抑制傾向といった気質的個人差が社会的参照 (Social referencing (Campos, J., & Stenberg, C., 1981)) における個人差と関連しているのであって、愛着の質とは関係がないともいえる。また、乳児の気質的個人特性と社会的参照・愛着行動は相互に関連しているとの結果も報告されており (Bradshaw, Goldsmith, & Campos, 1987), 母親を参照しながらの探索行動をどのように解釈し何を反映しているものと位置づけるかは、愛着や愛着行動をどのように概念化するかという問題とも絡んでいると思われる。これらの問題を念頭においたうえで、乳児の行動的抑制傾向が愛着行動とどのような関連を持っているのか、なぜそのような関連が見られるのかを考えていく必要があるだろう。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Bradshaw, D., Goldsmith, H., & Campos, J. (1987). Attachment, temperament, and social referencing: Interrelationships among three domains of infant affective behavior. *Infant Behavior and Development*, 10 (2), 223-231.
- Calkins, S. D., & Fox, N. A. (1992). The relations among infant temperament, security of attachment, and behavioral inhibition at twenty-four months. *Child Development*, 63

- (6), 1456-1472.
- Campos, J., & Stenberg, C. (1981). Perception, appraisal, and emotion: The onset of social referencing. In M. Lamb & L. Sherrod (Eds.), *Infant social cognition* (pp. 273-314). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Fox, N. A., & Calkins, S. D. (1993). Pathways to aggression and social withdrawal: Interactions among temperament, attachment, and regulation. In Kenneth H. Rubin & Jens B. Asendorpf (Eds.), *Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood* (pp. 81-100). Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.
- Grossmann, K. E., & Grossmann, K. (1988). Preliminary observations on Japanese Infants' behavior in Ainsworth's Strange Situation. *Annual Report, Research and Clinical Center for Child Development, Faculty of Education, Hokkaido University*, 1-12.
- Grossmann, K. E., & Grossmann, K. (1990). The wider concept of attachment in cross-cultural research. *Human Development*, 33(1), 31-47.
- Kagan, J. (1989). The concept of behavioral inhibition to the unfamiliar. In Steven. J. Reznick (Ed.), *Perspectives on behavioral inhibition*. (pp. 1-23). Chicago: University of Chicago Press.
- LaGasse, L. L., Gruber, C. P., & Lipsitt, L. P. (1989). The infantile expression of avidity in relation to later assessments of inhibition and attachment. In Steven. J. Reznick (Ed.), *Perspectives on behavioral inhibition*. (pp. 159-176). Chicago: University of Chicago Press.
- LeVine, R. A., & Miller, P. M. (1990). Commentary. *Human Development*, 33 (1), 73-80.
- Moran, G., Pederson, D. R., Pettit, P., & Krupka, A. (1992). Maternal sensitivity and infant-mother attachment in a developmentally delayed sample. *Infant Behavior and Development*, 15 (4), 427-442.
- Nachmias, M., Gunnar, M., Mangelsdorf, S., Parritz, R., Hornik, & Buss, K. (1996). Behavioral inhibition and stress reactivity: The moderating role of attachment security. *Child Development*, 67, 508-522.
- 近藤清美 (1993). 乳幼児におけるアタッチメント研究の動向とQ分類法によるアタッチメントの測定. 発達心理学研究, 4 (2), 108-116.
- 近藤清美 (1993). 数井論文への意見. 発達心理学研究, 4 (2), 182-184.
- Pederson, D. R., Moran, G., Sitko, C., Campbell, K., Ghesquire, K., & Acton, H. (1990). Maternal sensitivity and the security of infant-mother attachment: A Q-sort study. *Child Development*, 61 (6), 1974-1983.
- Sagi, A. (1990). Attachment theory and research from a cross-cultural perspective. *Human Development*, 33 (1), 10-22.
- Sagi, A., Van IJzendoorn, M. H., & Koren-Karie, N. (1991). Primary appraisal of the Strange Situation: A cross-cultural analysis of preseparation episodes. *Developmental Psychology*, 27 (4), 587-596.
- Scholmerich, A., Fracasso, M. P., Lamb, M. E., & Broberg, A. G. (1995). Interactional harmony at 7 and 10 months of age predicts security of attachment as measured by Q-sort ratings. *Social Development*, 4 (1), 62-74.
- Seifer, R., & Schiller, M. (1995). The role of parenting sensitivity, infant temperament, and dyadic interaction in attachment theory and assessment. In V. Waters, B. E. Vaughn, G. Posada, & K. Kondo-Ikemura (Eds.), *Caregiving, cultural, and cognitive perspectives on secure-base behavior and working models: New growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development* (pp. 146-174).
- Stevenson-Hinde, J. (1988). Individuals in relationships. In R. A. Hinde & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *Relationships within families mutual influences* (pp. 68-80). Oxford: Clarendon Press.
- Takahashi, K. (1990). Are the key assumptions of the "Strange Situation" procedure universal? A view from Japanese research. *Human Development*, 33(1), 23-30.
- Thompson, R. A., & Lamb, M. E. (1983). Security of attachment and stranger sociability in infancy. *Developmental Psychology*, 19 (2),

184-191.
Van IJzendoorn, M. H., & Kroonenberg, P. M.
(1988). Cross-cultural patterns of attachment:
Meta-analysis of the Strange Situation. *Child
development*, 59, 147-156.
Waters, E., & Deane, K. E. (1985). Defining and
assessing individual differences in attachment
relationships: Q-methodology and the

organization of behavior in infancy and early
childhood. In I. Bretherton & E. Waters
(Eds.), *Growing points in attachment theory
and research. Monographs of the Society for
Research in Child Development* (pp. 41-65).
Chicago: University of Chicago Press.

(1995年9月13日 受稿)

ABSTRACT

Attachement behaviors and behavioral inhibition in infancy:
The findings from the brief mother-child separation and reunion episode at home

Rie MIZUNO

Individual differences in the organization of children's behaviors with regard to attachment system were investigated. Twenty male infants and 20 female infants participated in the home observation study. Prior to the brief mother-child separation and reunion episode, children's behavioral inhibition was assessed. The behavioral inhibition was not related to the organization of the attachment behaviors toward the mother at the reunion episode but to the exploratory aspect of secure-base behavior at the pre-separation episode. The infant's separation distress was only related to the proximity to the mother at the reunion episode. These results suggested that the brief mother-child separation and reunion episode at home provided the opportunity for Japanese infants to show varieties of attachment organizations enough to assess individual differences of attachment quality.

Key words: Attachment, Behavioral inhibition, Secure-base behavior, Home observation, Infant